

平成28年度 まちづくり懇談会

湖東地区会場の要旨

平成28年10月25日（火） 19:00～20:30

湖東地区コミュニティセンター 参加者 72名

市長あいさつ

市長：それぞれの地区の小宮にお呼びいただいて交流をさせていただきましたことに感謝申し上げます。非常に冷え込んで参りました。八ヶ岳も白くなりまして、これから冷え込みが厳しくなってくると思いますので、体調管理には十分ご注意をいただきたいと思います。消防の皆さん聞いてください。これからファッションショーをしたいと思います。分団では防寒着を用意したところがあると思いますが、消防団員が冬の活動をするのは寒くていけないということで、奮発して茅野市消防団全員にかなり良いジャンパーを配備しました。冬場はこの黄色いジャンパーを着て活動している消防団員がいましたら、ぜひ激励の言葉をかけていただきたいと思います。スキー等には着ていけないようになっております。今日はお寒い中、お仕事でお疲れのところを28年度のまちづくり懇談会に大勢の皆様にご参加いただきありがとうございます。今日のテーマは、「茅野市の未来を大いに語ろう」ということでございます。これから先5年後10年後にどんな茅野市にしていったら良いか、そんなことを皆さんと大いに語り合いたいと思います。有意義な2時間になりますようお願い申し上げます。冒頭のあいさつとします。よろしく申し上げます。

湖東地区コミュニティ運営協議会会長あいさつ

湖東地区コミュニティ運営協議会会長：皆さんこんばんは。いつも運協の活動にご尽力いただきまして大変ありがとうございます。今日は市長並びに市の関係者と直接話し合いができるという機会でございます。皆さん方の日頃思っていること、疑問に思っていること等を、市長はじめ市の皆さん方にぶつけていただきたいと思います。活発な意見が出されると思いますのでぜひよろしく申し上げます。

—テーマと資料の説明 内容は宮川地区を参照—

市長：普段皆さんが思っていることを個別にお話しいただければと思います。これからはフリーディスカッションで行きたいと思いますので、何なりとご発言ください。

市民：小中一貫ということで始まっているということですが、モデルはあったのでしょうか。小中一貫というと校舎が一緒というのが基本ですが、理念として小中一貫ということで行かれるのでしょうか。小中一貫ということで茅野市の教育を世界に誇れる形で行うということですが、高校・大学も茅野市にはあります。高校は市でどうこうできるものではないと思います。そういうことを含めて将来的に子どもがまちを誇れるということになりますか。うち

の地区に限って言わせてもらおうと、縄文の遺跡があります。小さい子どもたちには、ここにはこういうものがあって、自分たちのまちにはこんなすごいものがあるということを誇ってほしいと思います。自分で説明できるかといえば難しい部分があるかと思います。誇れるものがあればこのまちに帰って来て子どもを育てたいということになると思います。教育に力を入れていることはわかりますが、中学を卒業した後高校へ行って、茅野市から来た子たちは変わっているということになりはしないかと心配しています。そういうことも含めてお話ししていただければと思います。

教育長：ありがとうございます。このまちに帰って来て住んでみたいということ、それが一番大切だと思います。モデルとして参考にしたところはいっぱいあります。4年間、奈良、京都、東京、三鷹、つくば、見ることができるところは全部見てきました。それぞれの地域の特色があって、これを目指すというものはありませんでした。だから茅野市型ということで作っています。長野県の場合は両小野の小中一貫校がありますが、両小野のやり方をそのまま茅野市にもってくるわけにはいかないので、茅野市型で作り上げてきています。小中一貫教育には2つの種類があります。1つは義務教育学校といまして、小中が一体化した学校です。もう1つは茅野市が進めようとしている小中分離型の学校です。分離型を進めている理由は、湖東小の児童は全員北部中に行くから校舎を合併することができます。しかし湖東、泉野、米沢の校舎を全部合併してしまうと、その学校の持っていた良さがなくなってしまいます。あくまでも良さを大切にしていきたいという考え方です。また学校を合併してしまうと、校長が1人、副校長が1人になり、教頭を含めても上層部が3人になってしまいます。今のやり方だと、中学校が校長1人教頭1人、小学校が校長1人教頭1人ということで子どもたちをよく見ることができます。理念としてかどうかということですが、茅野市では豊かな学びということと、発達に即して教えることを特色としていて、理念は1つの方法になります。この方法が全国的に注目されています。多くの学校でやっている小中一貫教育は、小学生と中学生が一緒に行事をやるとか、小学校6年生でやることを5年生でやって、中学校1年生でやることを6年生でやるというような形があります。茅野市の場合はそういうやり方はしません。もしも転校したときに子どもが困ってしまいます。今の小中学校の進め方で行く中で、教え方を共通化させていきます。一体型の校舎にするかどうかということですが、全国各地では小学校が小さくなってしまっていて維持できないところが、隣の小学校と合併して中学校も合併するという、教育とは別の経済的な基準からの小中一貫校が増えています。茅野市の場合はそうではなくて、子どもがより伸びていくように考えています。だからそういうことは現在の段階では検討していません。茅野市の子は中学校卒業後高校で他所の地域に行ったら変わっていると言われる心配があるということですが、良い意味で変わっているのなら良いと思います。茅野市では本を読んでいる子どもの数については、私は日本一といっても良いと思います。高校までつなげるということになると別問題になります。中高一貫校ということでは、清陵あたりがやっています。理科大と連携してやっていく、理科大の先生が来て授業をすることもありますが、大学までつながって仲良くやっていければ良いと思

います。

市長：教育長が答えにくい部分は私が答えます。高校・大学への連携ですが、東海大学諏訪高校、茅野高校では教育はもちろんいろんな交流をしています。例えば茅野高校では私は顧問になっていますし、商工会議所の会頭が会長になっています。生徒たちも以前に比べたら非常に前向きになってきたと思います。実は東海大学諏訪高校の校長は若葉台の区長で、市の区長会長をやっています。この間泉野のまち懇に来てくれて、非常に良い意見をいただきました。そういうことで高校ともより連携していかなければならないし、理科大は公立大学になります。組合長は私で、私が理科大の基本的な部分をマネジメントしていきます。茅野市だけでなく6市町村の大学になります。いろんな連携ができます。理科大の場合工学部1つの大学になりますので、総合大学に比べて少し難しい部分がありますが、連携をとっていくことで小学校から大学まで良い流れが作っていかれる環境になると思います。また、ここで県立高校の再編が動き出します。1学年5クラス以下の高校は再編していくという動きになっています。茅野高校がその対象になったとしたら、どうするかということも現実問題として起きてきます。これから確実に子どもの数が減っていくという中で、高校の再編は避けては通れない問題だと思います。例えば茅野高校を市立にして、非常に特色のある高校にしていくという選択肢もなくはありません。そういう時に茅野市民がどういう風に腹をくくるかという事態になることもあるかと思います。縄文教育の一環として、縄文かるたを作っています。12月7日にお披露目になります。私は方言かるたも活用したいと思っています。方言かるたと縄文かるたで知らず知らずのうちに子どもたちに刷り込んでいきます。何が何だかわからない保育園の子どもに近く縄文かるたがある、「習うより慣れろ」で縄文教育を保育園の内から取り組んでいきたいと思っています。そういうことが必ず小学校中学校であることかと思われされます。平成29年に第0回の八ヶ岳縄文フェスティバルを開催します。これは3年に1度のイベントとして続けていきたいと思っています。何で0回かというと、いろんなことをやってみて第1回にしようということで、第1回が2020年の東京オリンピックの年になります。オリンピックへ来る外国人をごっそりと縄文の地へ引っ張ってきたいと思っています。来年の第0回には本当に市民の皆さんに参加していただきたいと思っています。その中で縄文かるた大会を計画しています。今日は園長先生も見えていますが、12月7日に縄文かるたができますから、来年の秋の大会に向けてかるたとりをしょっちゅうやってもらいたいと思います。

教育長：縄文科のことを言い忘れしました。生活科と総合的学習という教科がありますが、その中から約11時間とって縄文科としています。湖東小学校の校長、湖東小学校でどんな状況か報告してください。

湖東小学校長：学年ごとに計画を立てて行っております。1、2年生は地域の素材、どんぐりや木の実、草団子を使いながら食などのことに取り組んでいます。3年生では地域を回ると

いう活動がありまして、中ツ原遺跡を巡りながら地域のことを知っていきます。4年生では中ツ原遺跡をPRするような取り組みを行っています。5、6年生では課題を自分たちで見つけて、課題を解決していく課題解決学習に取り組んでいます。いろんな体験の中から課題を見つけていくような状況です。先程このまちを誇れるようにとの言葉がありましたが、本当にこの地には自然に恵まれた良いものがありますので、そんなところを子どもたちに体験させながらこの地に還ってくるような子どもたちに育てていきたいと思っています。

市民：私は5年前に諏訪市から湖東笹原へ転居して30日には笹原の御柱祭に参加しました。私が住んでいるところは299号から湯みち街道へ抜ける渋川橋があるところの近くです。御射鹿池の駐車場の整備をやっているのは非常にありがたいのですが、ものすごくたくさん車が通ります。よく家の方に間違えて入ってきます。駐車場を作るだけでは観光客は来てくれません。道路標識の整備をしないといけないでしょうし案内板もいるでしょう。その先の明治温泉や渋辰野館などの観光旅館にはメリットがあるのか、地元の笹原・白井出あたりにメリットがあるのかと考えるとそれはなくて、駐車場の整備だけで終わってしまう可能性が高いです。結局地元の経済発展につながらないと駐車場を作っても意味がありません。先程市長から、工業と観光と農業の生産額出荷額が下がっているという資料が示されましたが、この先5年間でどこまでそれを抑制するのかという数値目標がないといけません。経済という観点から市がどう捉えていますか。経済が良くなるとどんな活動もできません。特に工業・観光・農業を経済的な観点から見たときに、どんな現実性をもってまちづくりにつなげていくのかお聞かせ願いたいと思います。

市長：まさにおっしゃるとおりで、今の市民プランもそうですが、数値目標を入れてどこまで達成したか検証できる計画になっています。第5次総合計画でも基本的な考えとして組み立てていきます。中には福祉等数値目標が当てはまらないような施策がありますが、産業経済系は数値目標を設定してやっていきたいと思っています。御射鹿池の話がありました。今県道を山の方に移動させて、駐車場の整備をしています。御射鹿池の前を通るときに危ないし、池に入って行ってしまっただけで踏み荒らすといったことは何としても解消しないといけません。不足していた駐車場も整備するというところでやっています。御射鹿池に来たお客さんにどういう風に対応するかということが問題です。単純に行けばあの周辺に売店とかレストランを造って消費させるということが考えられますが、それは考えていません。あの場所は道路を直して駐車場をつけるくらいが限度だと思います。あれ以上自然環境や景観を損ねてはいけません。ではどうするかというと、お手元の資料の「観光まちづくり出前講座相談会」があります。観光まちづくり推進室等がオール茅野での企画をしていて、いろんな例があります。柏原地区での炭焼き体験とか、田んぼをスケートリンクにするとかいろいろあります。御射鹿池に来てもらってそのまま帰らせるのではなく、笹原へ寄って鰻絵を見て、地域の人とおしゃべりをして、食事をして金を落として帰ってもらうというような仕組みを作っていかなければなりません。これがこれからの新しい観光ツアーの形態だと思っています。

1つのキーワードは体験ということになるでしょうし、人との交流になると思います。観光まちづくり推進室が4月に発足しました。その室長が金山に住んでいる高砂という人間です。彼がまさにその仕掛人でして、これからバンバン仕掛けていきます。ぜひ笹原でも出前講座に高砂を呼んで、どんなことをするのか、笹原で何ができるかというようなことを聞いていただければ良いと思います。今笹原では農地の貸出しをしていますが、そういうことも活用していかなければならないし、広げていきたいと思っています。そんな組み立てで観光地というだけではなく、観光地域として考えていきたいと思っています。御射鹿池を見て、明治温泉でお風呂に入って、笹原へきて鰻絵見学をして民泊するというようなことで人がくると思います。茅野市では生産額・出荷額において工業がダントツです。工業が2,000億円くらい、観光は300億円くらいなので桁が違います。これは大事にしていかなければならないということです。理科大が工業系の大学です。インターンシップなどを利用して企業にとって理科大が必要、理科大の学生も卒業したら地元の企業に確実に入れるという、入口だけでなく出口政策もしていかなければなりません。これは企業の方にも協力してもらいながらやっていきたいと思っています。

市民：今観光のお話がありましたが、私が気になっているのは、茅野市で太陽光発電が非常に増えていることです。農地の方に毎回のように申請が出ています。市としてはどういう風にお考えでしょうか。

市長：基本的に茅野市では自然エネルギーや再生エネルギーは大事にしていきたいという風に思っています。皆さんの方でも太陽光自体を否定する方はいないと思います。どういう風にメガソーラーやミドルソーラーを推進していくかということに尽きると思います。節度のある太陽光を推進していきたいということが茅野市の方針です。しかし本当にいろんな案件が茅野市に寄せられています。その中でガイドラインを作って景観計画の中に位置付けています。条例を遵守した上で、もう少し自然環境に合ったものに位置付けることが必要になってくると思います。茅野市と同じような状況は県内の全ての市にもあります。県の市長会の中でもこの問題を大きく取り上げたいと思います。11月の半ば頃には知事との懇談もあります。県としての考え方を出示してもらうように要望していきたいと思っています。先程も言いましたように、節度のある太陽光発電の設置を求めていきたいと思っています。

市民：皆さんご意見が出ないようですので私の方から1つ紹介したいと思います。農業の関係ですが、私の経験ではなく友達の行っている事業です。農業は市長さんもおっしゃられましたように10年を目途に衰退していくという状況の中で、農協を中心に出荷を行っていると思います。その脇役の事業を行っています。無農薬・有機質ということを売りにして個人でやっております。出荷先は都内の一ツ星・二ツ星・三ツ星のフレンチやイタリアンのお店です。しかしその需要に追い付かない状況のようです。日本のトップの方々がその野菜を求めて来ているようですが、需要が追い付かずお断りをしているようです。これから退職してど

うしようかという状況の中で、無農薬・有機質の商品についてはものすごい需要があると話していました。今は食に対する安全ということでレストラン等でも自前の測定器で検査した上で、農薬のない商品を使っているそうです。1つの農業のあり方ということで紹介をさせていただきました。

市長：その分野の人達はいくら高くても健康に良いものを買うことは事実であります。しかし全てを無農薬にすることができないのも事実です。周りに農薬を使っている畑があれば無農薬というわけにはいきませんので、そういう環境づくりも必要だと思います。1つの農業の可能性であり、そんなに多くは作っていないと思います。そういう中できちんと対応できる人なのだと思います。これから観光とも絡めてどういう形ができるのか、いろんな発想で取り組んでいかなければならないと思います。茅野市には農業支援センターもございます。第5次総合計画の中で、10年後の農業というものをどういう風に見据えてやっていくかというのを計画していきたいと思います。特徴的な野菜作りをされている方は茅野市の中にも結構います。ノウハウ等も伝授していかなければならないと思います。太陽光とも関連すると思いますが、遊休農地になっていると、手っ取り早く売ったり貸したりするということになります。そうさせないために鹿に強い作物を作っています。今年は糸萱と柏原でエゴマを栽培しました。なるべく山の方に作るように言いましたが糸萱では里の方になってしまいました。鹿が実際に来ましたがエゴマは食べられませんでした。山の荒れているところでは、エゴマを育てていければと思います。エゴマオイルが健康に良いということはさかんにテレビでやっています。今年は試験的にやりました。作るのはそれほど難しくはありませんが、それを商売にするのは大変だと思います。11月17日には新潟の業者に来てもらって、機械で選別します。来年にはオイルにするにはどうするか調べてみて、うまくいけば遊休農地を解消する手段の1つにエゴマを使っていきたいと思います。いろんな自治体がやっていますが、第6次産業として全国に発信していけば良いと考えています。農業というよりも農地の保全に貢献できれば良いと思います。

市民：まちづくりというよりも地域づくりという中で、この辺は昔日本の銀座だったとある先輩から言われました。それは人口比率が今でいう銀座と同じくらいで、日本の中心地だったと教わりました。それがこの地域の特色のキーワードかと思います。

市長：それは縄文時代のことですか。

市民：そうですね。縄文時代からの発展で御柱祭だったり地域のお祭りだったり、日本の文明・文化は世界の中でも違うという経済学者の見解がありました。やはり神々が住む国だと思うと、縄文時代まで遡るのかなあとと思います。

市長：先程来年八ヶ岳縄文フェスティバルをやるという話をしましたが、そのベースになって

いるのは縄文プロジェクトです。平成22年3月に縄文プロジェクトを立ち上げまして、平成26年にさらにバージョンアップして、構想だったものを正式に縄文プロジェクトに位置付けました。なぜやろうと思ったかという、平成21年10月に2体の土偶が大英博物館に招聘されていきました。その時は仮面の女神は重要文化財でした。私も見に行きましたが、大英博物館の中に多くの収蔵物がある中でも生き活きとしていました。どうしてこんなに生き活きしているか考えたときに気付いたことがあります。大英博物館にはロゼッタストーン、ミイラ、ギリシャの彫刻等があり、とても素晴らしいのですが、全て略奪してきたものです。その時その存在自体が悲しげに見えました。翻って土偶を見ると、非常に小さいのですがのびのびとしていて温かいと感じました。帰ってきて国宝が2体、尖石遺跡は遺跡の国宝ですし、これだけのものが当時57,000人の都市にあるのは素晴らしいと思いました。これをもっと大事にしなければならないと思ったのがきっかけでした。しかし理念だけでは稼ぎになりません。考古学的な価値だけだとすると揺るがないものがありますが、市民に活用されているかというところがありませんでした。考古学の世界だけに止めずに、普段の生活の中で普遍的に活用していくことが大事だと思いました。そして縄文プロジェクト構想を作りました。それには縄文を知ること、広げること、楽しむこと、生み出すこと、守ることが必要だと思いました。この5つの視点で取り組んでいます。まだまだPR不足だと言われていしますので、しっかりとPRして皆さんにも参加していただきたいと思います。縄文教育も縄文プロジェクトの1つです。縄文時代に培った伝統が、日本文化の基になっていると思っています。御柱の原点もそこにあると思います。神々が宿っている日本文化があり、そこに殺伐とした現代社会があります。東洋の文化は略奪の文化です。農耕も自然を破壊して行わないとできません。縄文時代は自然の実を採るなど自然と共生して1万年続いた文化です。現代社会を築いた西洋文明がもっていないことです。これからの人類の繁栄を考えたときに縄文文化、日本文化が大きな意味を持つと思います。そんなバックボーンで縄文プロジェクトを進めています。

市長：今日は有意義なご意見をいただきました。特に小中一貫教育、茅野市が目指す教育につきましては、山田新教育長が身を粉にしてやっただいております。校長先生、教職員の皆さんとともに丁寧に進めていきたいと思っておりますのでよろしくご協力をお願いしたいと思います。これで今年のまちづくり懇談会は終了とさせていただきます。ありがとうございました。